

器楽合奏のいろは（編曲も含めて）

仁愛女子短期大学 教授 大久保 功 治

【編曲講座の趣旨】

人間の音楽的な発達には聴くことから始まる。母親の歌声やテレビの音楽などがそれにあたる。やがて、耳にした音楽を口ずさむ、いわゆる歌うことが始まる。聴くこと、歌うことはすべての人に通じる音楽活動の基本である。友人同士でカラオケを楽しむなどは、立派な音楽表現活動である。さらにこれが進歩すると、楽器を使って演奏表現することに発展していく。宴会で徳利や茶碗を叩く、手拍子を打つなどはこれらが自然的に発生したものであり、楽器演奏の初期的段階である。幼児教育に於いては、聴くこと、歌うこと、楽器あそび等の音楽表現活動を無理なく、ごく自然に導入することが望ましい。音域幅の広い曲を歌わせたり、複雑な技術・呼吸法・指使い等が必要となるような楽曲の楽器演奏をさせることは、結果として大声で怒鳴る歌い方になったり、楽器アレルギーや音楽嫌いの予備軍を作りかねない。それでも、発表会等では親御さんが驚くような立派な演奏を披露し、子どもの成長を見届けさせてあげたい、と思われる先生方がほとんどのはず。そこで、本講座においては、指導が無理なく自然にできて、演奏表現が平易で効果的、且つ保育者の持てる音楽的な知識で充分可能な編曲の基本を学ぶこととした。

【開催日時】

平成 27 年 9 月 5 日（土）

【指導の実際】

5 歳児 20 人による「森の音楽家」譜例①を設定して、編曲の実際を段階的に指導した。

使用する楽器については以下の様に設定してみる。
鍵盤ハーモニカ 6 人／木琴 6 人／タンバリン 2 人／カ

スタネット 2 人／鈴 2 人／ベル 2 人。楽器の割り当て人数は、出来上がった演奏にも大いに影響を与えるので注意が必要である。メロディー楽器は音量を考え人数を決定することが重要となるし、打楽器類は多すぎると雑音の原因となるので、その数には充分な配慮が必要である。

（Ⅰ）メロディー楽器の編曲を段階的に行う。

1. 譜例①が演奏できた段階で、オクターブを分けて演奏してみる。（譜例②）

オクターブでメロディーが動くことによってメロディーに響きが生れる。これだけの事で、音楽の表情は素晴らしくなる。しかも、子ども達にとってはオクターブ上（または下）で弾くだけの事でさほど困難ではないであろう。オクターブの分け方は、この場合、低音部 4 人、高音部 2 人とした。一般的に高音部が少ない方が安定した効果的な響きとなる。

2. メロディー楽器を交互に演奏させる。譜例③
繰り返しごとに楽器を変えて演奏することで、より複雑な表現が可能になる。また、フォルテやピアノに合わせて楽器を変えてみるのも効果的である。
3. メロディーと同じリズムで簡単なハーモニーを付けてみる。

ハーモニーの付け方は様々であるが、ここでは主としてメロディーの 3 度下を演奏する。譜例④
#F が出てくるとなど、少し難しいかもしれないので、十分にメロディーが演奏できるようになってから、余裕のある子どもに挑戦させる程度にすることが望ましい。この場合（Ⅰ）－1 のオクターブ別は人数の関係で行わない。



4. ハーモニー楽器によって効果的なハーモニー感を出す。

2つのベルで和声音のひとつを演奏する。この場合、Gメジャーの和音ではGの音を、Dメジャーの和音ではDの音を演奏する。根音のみを選択する。譜例⑤ 音楽表現の幅が広がり演奏が色彩的に変化する。勿論、根音以外の第3音、第5音の和声音の使用も可能であるが、ここでは取り上げない。

(II) リズム楽器の編曲。譜例⑥

1. もっとも基本となる強拍のリズムをタンバリンで演奏する。
メロディーを口ずさみ、宴会の手拍子感覚で一拍ごとに打ってみる。強拍を強調することにより、曲全体が安定した感じになるが、常に強拍が存在すると音楽がマンネリ化するので、曲想に合わせて強拍を打たない部分を作ることが望ましい。
2. 強拍に対応した弱拍のリズムをカスタネットと鈴で演奏する。

いわゆる相の手のリズムで、音楽全体に活気を与える重要なリズムである。基本的には、強拍の裏拍を打つのが自然であるが、弱拍も常時打つとその効果を失うので、曲想に合わせて変化させることが望ましい。

3. 強拍と弱拍の担当楽器については、一般的に低く音量の豊かな楽器を強拍部に、高く軽い音量の小さい楽器を弱拍部にする。

(III) ピアノパートの作成

子ども達の演奏をリードする意味において、保育者が担当することが原則である。

練習などにおいては右手部分でメロディー、左手部分で和音を弾いて正確なテンポ感を伝えることが望ましい。ただし、子どもたちの演奏の完成度が上がってくれば、メロディーの無い完全な伴奏楽譜で演奏したほうが、効果的な演奏が期待できる。譜例⑦ その際の要点は下記の様になる。

1. 基本的にはピアノ伴奏の強拍、弱拍のパターンが(II)の構造と同じに成るように留意する。
2. 左手に強拍部分を右手に弱拍部分を配置する。
3. 基本的に左手は和音の根音を弾く。実際の楽曲では、根音以外の音を使用することが多いが、ここでは取り上げない。
4. 右手の和音は原則として「共通音は同一声部に保留する」こと。GメジャーコードとDメジャーコードを連結する場合、共通音はD音であることに留意して音を構成する。これらを理解することによって、新たな編曲の可能性が広がる。

(IV) バス・パート作成 譜例⑦の⑧

バス音は、ピアノの左手部分をシンセサイザーなどで重複して演奏する。

原則的には、保育者が担当することが望ましく、正確なテンポで全体をリードすることによって、安定した深みのある演奏が可能になる。

【その他の講座内容】

講習の後半は、「森の音楽家」に続いて、「ミツパチマーチ」を教材に編曲法を学習した。上述(Ⅰ)－3の項目以外は、ほぼ同じ要領で学習した。詳細については、紙面の関係で省略した。

<譜例>

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧ Bass 譜面